

京都市陶磁器試験場の大正期の試作について

佐藤 一信

我々が日本の時代区分で言う近代、明治から大正期における製陶技術の流れやその周辺に眼を向ける理由は何か。それは言うまでもないが日本の陶磁分野における近代とは何か、という問いに基づいている。明治から大正期において、東洋とは体系の異なる西洋の製陶技術導入や、技術習得の徒弟制度中心から教育制度中心への移行など、技術、製陶に関する変化、通常、近代化と呼ばれる変化が著しかったのである。逆に言えば、陶磁分野における近代について考察する上で、製陶技術とその周辺を置き去りには出来ないのである。

例えば、明治期に西洋から導入された泥漿鑄込み成型は、制作者たちにどのように受け止められたのであろうか。これまでの土の扱いとはまるで違う、泥状の土を用いて形を作っていく。それは制作者にどんな夢を見せ、あるいはどんな苦悩を与えたのか。

しかし、言うは易いが、製陶技術そのものに関すること、中でも西洋から導入された製陶技術や窯業化学については、その体系的な理解が充分でない筆者に何を捉えることが出来るのか見当さえつかない、というのが偽らざる現状である。だが、日本の陶磁分野の近代を浮かび上がらせるはずの製陶技術とその周辺の事柄は、現在、静かに、しかし確実に、我々の視界から消え去ろうとしている。

例えば、明治・大正期において製陶技術の流れに大きな役割を果たした各地の公立陶磁器試験場、工業・窯業高等学校は、今、転換期を迎えている。産業としての陶磁器制作が長い低調期にある現在、試験場においても機構改革による縮小があり、あるいは、かつての製陶技術に関する研究や試作が顧みられることも少なくなりつつある。各地にある実業学校は、明治・大正期において製陶技術やデザインをリードする人材の先端的な教育機関であったが、現在、これも社会情勢の変化による定員割れ、統廃合等の事態に直面している。

これまでも製陶技術や装飾技法、デザイン研究による試作は、役割を終えれば積極的に保存、管理、活用されることはなく、試験場や学校の倉庫などに放置されていることが多かった。しかし、今後はその施設の行く末さえ不透明な時代が変わっていくかもしれない。今、これらを注視し、その意義について考察していかなければ、その機会を失するかもしれないのである。

本論で取り上げる京都市陶磁器試験場も、これまでも繰り返しその意義、重要性が指摘されながら、気が付けば、その西洋の製陶技術導入、デザイン研究に関する最先端機関、あるいは教育機関として果たした役割について総合的な検証がなされないままに（註1）、歴史の闇の中に確実に姿を消しつつある。

従って、ここで取り上げる京都市陶磁器試験場の大正期（1912-1920）の試作品においても、現時点でその研究目的や重要性を理解出来ない部分がほとんどであるが、まずここに提示して今後の基礎

資料、検討材料とし、若干の考察を加え、この大正期の活動のほんの一端を明らかにしようと試みるものである。

日本で最初の専門的な陶磁器研究機関である京都市陶磁器試験所は、1896（明治29）年に京都市下京区五条通橋東5丁目5番戸に設立された（註2）。設立の目的は、京都における陶磁器制作の振興、海外輸出の立て直しと拡大であった。具体的な活動に照らし合わせれば、独自目標による製陶技術に関する研究、器械設備導入促進、依頼試験への対応といった技術革新指導、原料分析と開発などの資源供給支援、図案調整・配布や奨励会への支援といったデザイン革新指導、伝習生制度による人材育成などが挙げられる。

設立当初の名称は京都市陶磁器試験所で、1903（明治36）年に農商務省令により、京都市陶磁器試験場の認可を受け、以後、京都市陶磁器試験場と改称している（本論では大正期の試作について考察することから、基本的には京都市陶磁器試験場と表記する）。その後、京都市陶磁器試験場は、1919（大正8）年4月に陶磁器試験所官制公布により、国立移管され、農商務省所管の陶磁器試験所へと変わり、1920（大正9）年1月に正式に廃止された（註3）。つまり、活動期間は1896（明治29）年から1920（大正9）年までである。

近年、近代の陶磁器制作に関する出来事の再検証が様々な角度から行われており、それによって、ここで取り上げる京都市陶磁器試験場の活動にも、今日的な関心の眼差しが向けられている。

つまり、現在、京都市陶磁器試験場が注目される理由でもある、伝習生として楠部彌弐や近藤悠三らが在籍し何を見て何を学び、その後の活動へと繋がったのか、小森忍が技手として中国陶磁の釉薬研究に没頭したという具体的な活動内容、東京高等工業学校を卒業した河井寛次郎、濱田庄司が入所し行った艶消釉や青磁釉などの研究、あるいは、農商務省図案及応用作品展覧会（以下、農展）の陶磁分野において京都市陶磁器試験場が特別出品という形で制作をリードした活動や背景などへの眼差しである。ここで挙げた事柄は、どれもが大正期に収まるものがある。

しかし、大正期について述べる前に、明治期の活動について触れなければならない。つまり京都市陶磁器試験所に始まる活動であるが、この時期については『京都市立陶磁器試験場報告書控』（明治30年度—明治42年度）、『本場創立沿革答申書』（1902年・1905年）が基本史料であり、依頼試験や独自の研究目標のことはそこに記してある。だが、研究に基づいた成果が結実した試作について、明治期の実際の作品はほとんど確認出来ていない。つまり、日本で初の陶磁器に関する試験研究機関として活動を始め、ヨーロッパでのアール・ヌーヴォー様式が盛行した時期の製陶技術や図案研究の試作、そして、図案研究団体「遊陶園」とともに図案改良を行った初期の試作が確認出来ないのである（註4）。このように実際の試作が確認出来ない現状であり、残る文献史料等から明治期の京都市陶磁器試験場が行った研究・試作のことをごく簡単に確認しておきたい。

例えば、『松風陶器合資会社私報 第4号』（1910年10月25日発行）には、東宮殿下（時の皇太子・後の大正天皇）の京都行啓がその年の10月3日にあり、その奉迎の行事の一環として、松風陶器本社内に、市内から集めた陶磁器を陳列し、その中に陶磁器試験場の所蔵する陶磁器参考品と試作が並べられたことが記されている。さらに、その当日の陳列品を詳細に記録した『東宮殿下奉祝陳列陶器類目録』（註5）によれば、京都市陶磁器試験場は、次の7点の試作品を陳列した。なお、このメモにはごく簡略な器形も図示されている（図25）。

それによれば、(1)染付磁器で、ウルトラマリン（色）で蒲公英を描いた壺、(2)油絵調の田舎婦人を見込みに描いた皿、(3)山水墨絵風を描いた白い陶製の皿、(4)鉄色の結晶釉の花瓶、(5)草花を描いた白い陶製の花瓶、(6)マジョリカ釉の花入、(7)彩磁ハツ手花瓶の7点である。中でも興味深いのは、(7)

の彩磁八ツ手花瓶であるが、図(図 25)にある口縁部に渦巻いた取っ手がある花瓶の形状は、明らかに西洋的な器形を持つものである。また、「八ツ手」が彩料で描かれたものなのか、有色の泥漿による盛り上げ技法などでレリーフ装飾に仕上げた「八ツ手」なのかは不明であるが、いずれにしても釉下彩技法を連想させる「彩磁」技法を用い、「八ツ手」の装飾を施しているのであり、西洋のアル・ヌーヴォー様式の影響を強く想起させる試作と言えよう。これによってこの時期の京都市陶磁器試験場が釉下彩(釉下彩料研究、彩画研究など)研究、そして、図案研究においてはアル・ヌーヴォー研究を行っていたことがわかる。その他にも、結晶釉、マジョリカといった当時の京都市陶磁器試験場の研究目標を实践した試作が主に陳列されたことは、自らの特徴を示したものと言って良いだろう。

あるいは、大日本窯業協会雑誌に掲載された図案なども、明治期の京都市陶磁器試験場の試作の傾向をうかがえる史料である。一例を挙げれば、1906(明治 39)年の 170 号には京都市陶磁器試験場技手福田直一による波間に浮かぶ帆船を図案にしたマジョリカ飾皿の図案が掲載されている(註 6)。

この他に、『京都市立陶磁器試験場報告書控』や第 5 回内国勸業博覧会(1903 年)出品作目録等からも、試作の傾向をうかがうことができる。こうして、文献資料から明治期の試作の傾向をわずかに垣間見ることは出来る。

では、それ以降の京都市陶磁器試験場の現存する試作は、たとえば、これも実に限られているが、現在確認されている試作は、大正期と先に結論し、以下、その事例と根拠を示しながら考察していく。

京都市陶磁器試験場の試作を考察する上で、まず基準となる試作は、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵の《青磁耳付花瓶》である。この作品は、大正天皇が即位の大礼を 1915(大正 4)年 11 月に京都御所紫宸殿で執り行うのを記念し、京都市から献上したものである(註 7)。

また、この献上した《青磁耳付花瓶》と同時に制作されたと推察される同型品(図 10)が、1915 年当時の場長であった植田豊橋(1860-1920)のご子孫宅に残されており、これも同様の基準試作と位置づけられる。これらの試作の底部には特徴ある「陶」という印銘(図 11)が伴っていることから、この印銘の有無によって、少なくとも 1915 年を含む京都市陶磁器試験場の試作の可能性が高いという判断が可能となった。なお、植田豊橋ご子孫宅の《青磁耳付花瓶》の底部にある「陶」の印銘を確認すると、幅 1.3cm ほどであり、また畳付の一部に数字の「11」とも読める彫りのような痕跡もある。

また、この「陶」の印銘が国立移管後の陶磁器試験所でも用いられた可能性について考えなければならぬが、現時点までの調査では、陶磁器試験所の流れを汲む産総研に残る試作品の中に、この「陶」の印銘を持ち、かつ、他の資料等から陶磁器試験所時代の試作と推定されるものは認められない(註 8)。さらに、京都市陶磁器試験場が国立移管された後、京都市陶磁器試験場附属の伝習所は、1920(大正 9)年に新たに京都市立陶磁器講習所に引き継がれるのであるが、そこでも「陶」が用いられた可能性は低い(図 24)(註 9)。よって、この「陶」の印銘をもつ試作は、1915 年を含む京都市陶磁器試験場の試作の可能性が高いと言って良いだろう。

さて、この《青磁耳付花瓶》の献上があった 1915(大正 4)年には、年の初めから京都市陶磁器試験場を揺るがすような出来事があった。突然の場長の交替である。試験場(所)創設以来の初代場長(所長)であった藤江永孝(1865-1915)が腸チフスによって同年 1 月に急逝したため(註 10)で、3 月、二代場長に植田豊橋が就任したのである。

後年の記述ではあるが、この出来事によって試験場に変化が起こった、と次のように記されている。「植田豊橋氏就任後ハ試験場ノ経営方針ハ稍々趣ヲ一変シタルヤノ感アリテ東洋趣味鼓吹ニ重ヲ置ケリ同年秋大正帝御即位ノ大典ヲ京都市ニ譽■セラルトヤ市ヨリノ献納品トシテ当场新研究ニカトル青磁花瓶ヲ指定セラレタルハ当時世人ノ注目ヲ引キシ所ニシテ之等ニ端ヲ発シテ各種有色磁並ニ新窯変

釉各種ノ創作ヲ見ルニ至レリ」(註 11) (■は筆者が読めず)

この記述は、まず植田が就任したことによって、試験場の研究・試作の方針が大きく変化し、東洋趣味重視を打ち出したとしている。これを逆に読むと、藤江場長(所長)時代は、西洋的な趣味(指向)が強かったということであろうか。それが場長の交替によって、一変したというのは大変興味深い指摘である。しかし、検討する材料が少ない現段階では、こうした指摘を念頭に置きつつ、ひとまず先へと進みたい。

植田豊橘ご子孫宅の《青磁耳付花瓶》(高さ 33.1cm 口径 12.4cm 胴径 15.2cm 底径 11.2cm)は、先に述べたように、大正天皇の御大典を記念して献上した宮内庁三の丸尚蔵館所蔵品の姉妹作品である。この試作には目立った瑕疵もなく、献上品に不測の事態があった時の代替品かとも推測される。しかし、無論、こうした重要な試作の制作は入念に試験焼成を繰り返したであろうから、同型品は他にも数多くあったものと想像される。

この試作に対し、京都高等工芸学校長で、京都市陶磁器試験場の顧問でもあった中澤岩太は、「先般大札ノ際京都市ノ献上物トシテ製作ヲ命セラルヽヤ、毘沙門堂ニアル青瓷ノ風ニ倣フテ花瓶ヲ造ルヤサシモ古今人ノ及ハサル妙技ノ域ニ達シタル製作ヲ行ヒ世人ノ好評ヲ博シタル」(註 12)と述べている。当時、京都の毘沙門堂にあった青磁とは、現在、和泉市久保惣記念美術館が所蔵する国宝の《青磁鳳凰耳付花瓶「万声」》であるが、その風趣に倣って制作し、妙技と言える域に達する制作を行ったというのである。

しかし、実見した印象を率直に言えば、本試作の「青磁色」は、やや暗いモスグリーンの色調で全体に均質で平明な印象を受けるもので、現在の我々の眼から見て、手本とした龍泉窯青磁の名品と評される「万声」の持つ色調、釉色にはほど遠く、本歌に迫っているとは言い難い。この違和感は何故か、それは次に引用するいくつかの記述に見ていきたい。

まず、先の「同年秋大正帝御即位ノ大典ヲ京都市ニ譽■セラルヽヤ市ヨリノ献上品トシテ當場新研究ニカヽル青磁花瓶ヲ指定セラレタルハ当時世人ノ注目ヲ引キシ所ニシテ之等ニ端ヲ発シテ各種有色磁並ニ新窯変釉各種ノ創作ヲ見ルニ至レリ」という記述をもう一度振り返る。ここでとくに注目すべきは、この青磁花瓶などに端を発した各種の有色磁の創作があったという箇所である。この京都市陶磁器試験場の《青磁耳付花瓶》は、釉薬による青磁ではなく、素地に色を着けた有色磁であり、恐らくはそれを妨げない釉薬をかけて焼成し青磁の色調を狙ったもの、ということになる。

大正期の試験場については、その公の記録がほとんどないので詳細は不明であるが、《青磁耳付花瓶》が有色磁であることについては、同年に五代清水六兵衛(六和)が独自に完成させた表現技法「大札磁」についての解説の中でも次のように紹介されている。

「大札磁は大正3年から4年にかけて陶磁器試験場が試作を行っていた青磁の上釉をかけず、素地に色土を加えて青くすることにより、青磁を作ろうという開発を六和が応用したもので、素地にニッケルを加え桃色の素地を完成している。」(註 13)

さらに補足すれば、1931年に(国立)陶磁器試験所が発行した『商工省所管 陶磁器試験所業績大要 附 元京都市立陶磁器試験場の主なる業績』では、京都市陶磁器試験場の業績として、有色磁の研究を挙げ、「磁器白色素地に顔料、鉍物を添加し色釉のみを以てしては焼成上困難なりし点を比較的容易ならしめ」たとしている。さらに続けて「即ち青磁、黄磁、象牙磁、水明磁等にして此の方法に依りて大正天皇御大札の際、青磁花瓶を謹製献上」したと記している。

この上の記述では、例えば青磁色を比較的容易に出すことを主な目的としていたように読みとれるが、これを応用することで、高い芸術的表現の可能性を持っていたことは、5代清水六兵衛の大札磁

の例からもうかがえる。

しかし、現時点では、この有色磁技法による青磁の研究については、詳細不詳であり、今後の調査によって明らかにしていきたい。また、京都市陶磁器試験場では、こうした有色磁による青磁研究と恐らくは並行して、もしくは、その後に行われた、釉薬研究からアプローチする青磁研究もあったことも付け加えておきたい（註 14）。そして、この有色磁に関する、京都市陶磁器試験場のさらなる研究と試作の成果については後に述べる。

大正期の京都市陶磁器試験場の試作を考える際の興味深い文献資料として、『大典記念京都博覧会報告』が挙げられる。これは 1915（大正 4）年の大正天皇即位を記念して京都市によって挙行された大典記念京都博覧会の報告書で、そこに京都市陶磁器試験場が出品した 43 件の試作の目録（作品名のみ）がある。

そこには、窯変釉花瓶、青マット釉花瓶、窯変インク壺など、釉薬装飾に特徴をもった試作や、マルホフ（報告書中ではアルホフ）式花瓶、マルゴールド菓子器といった流行する西洋的な図案を施した試作、そして、支那画花瓶、宝相華釣花瓶、牡丹唐草菓子器といった東洋的な傾向を想起させる記述が見受けられる。さらには、黄磁藤花花瓶、象牙磁象嵌香合といった当時最新の有色磁研究の成果を生かした試作の出品も見受けられる。

さて、2004 年に当館で行った「近代窯業の父 ゴットフリート・ワグネルと万国博覧会」展の時点で、何点かの作品を京都市陶磁器試験場の試作として初めて紹介したのだが、京都市陶磁器試験場の試作と判断する決め手となったのは、同展に出品した《釉下彩龍文香合》（高さ 3.1cm 胴径 7.2cm）

（個人蔵）の存在であった（図 22）。この香合は、《青磁耳付花瓶》と同様の「陶」の印銘を持ち、「黄磁龍紋香合」と墨書された共箱と布に「京都市陶磁器試験場之印章」（図 23）があったこと、同香合が第 7 回の農展図録（1920 年発行）に掲載された「黄磁龍彫刻磁器香合」の写真と非常に酷似することがその根拠であった。

加えて、1913（大正 2）年に始まった農展に当初より特別出品を行った京都市陶磁器試験場の試作の図版は、試作の特徴を垣間見る貴重な基礎史料である。

これらによって、さらに数点の陶磁作品が同試験場の試作であることが判明した。それが独立行政法人産業技術総合研究所中部センター（以下、産総研と呼ぶ）の所蔵品 2,373 点の中に残っていた試作品である（註 15）。

京都市陶磁器試験場は 1919（大正 8）年に国立移管されるが、京都市陶磁器試験場がその建物等、私有財産一切を寄贈した陶磁器試験場の流れを汲むのが、現在の産総研である（註 16）。であるから、産総研に京都市陶磁器試験場の試作品が残っていることは何ら不思議ではないが、産総研の所蔵品については、引き継がれた台帳などが残されておらず、名称などを示す古いラベルもないため（註 17）、上記の基準となる試作を確認出来たことで、初めて判別が可能となったものである。

しかし、上記の基礎資料等と比較し、京都市陶磁器試験場の試作と確認、あるいは推測されるのは、産総研の所蔵品中でもわずか 8 点である。本論では、産総研に残る 8 点の京都市陶磁器試験場に関する試作の内、とくに重要と思われる 4 点を採り上げる。

《黄磁藤花図花瓶》（高さ 24.8cm 胴径 10.0 cm 口径 2.2cm 底径 4.9cm 産総研所蔵 no2176）（図 1）は、黄色の有色素地の上に、泥漿を筆塗りして文様を盛り上げて作る技法で、白い藤の花と白緑色の葉の装飾文様を大変繊細に浮彫のように施した花瓶である（図 2）。この技法は、フランスのセーヴルやドイツのマイセンで行われたパツィオパット（pâte sur pâte）と呼ばれるものである。ここに

において、パツィオパット装飾のベースとなる素地を有色磁としていることが、その上に施される装飾技法を美しく効果的に用いる上で重要であったことがうかがわれる。京都市陶磁器試験場の有色磁研究のひとつの成果がここに看取できる。実際、うっすらとした黄色の器体の上に施された白色と白緑色による藤の花が咲き乱れる浮彫状の装飾は、従来にない繊細さと器体との一体感を生じさせている。印象もフランスやドイツに範を取りながら、東洋的な印象を持つものである。この《黄磁藤花図花瓶》は、京都市陶磁器試験場の試作が洗練された美的な装飾表現をも持ち得た例として挙げられよう。底部には「陶」の印銘（図3）を伴う。

この《黄磁藤花図花瓶》が先述した『大典記念京都博覧会報告』に記載のある黄磁藤花花瓶と同じタイプのもと考えて良いと思うが、これがこの時期の特徴的な試作の一つであり、そこに植田の関与が大きかったこと、そして、この花瓶が好評を博したことなどを次の資料からうかがい知ることが出来る。

1915年の記述と思われる植田豊橋の子息の日記（図21）に、東京にて京都市陶磁器試験場の試作を販売したという内容が記されている（推測ではあるが、東京にある農商務省商品陳列館で行われていた、遊陶園など京都三園の展覧会を指すと考えられる。）父（豊橋）が初めて試みた黄土の磁器作品がかなり売れたが、これは「菊地様（画工）ガ藤ヲ書カレタモノデ大分評判ガヨカッタトノコトデアル」と締めくくられている（註18）。

ここで名前が出てくる菊池とは、試験場の技手で、遊陶園の活動にも図案家として関わった菊池左馬太郎（号・素空）である（註19）。

ここに至って、植田豊橋が場長となって、東洋的趣味を生かした優れた制作があったこと、青磁花瓶などに端を発した各種の有色磁の創作の更なる可能性が認められるのである。

《釉下彩牡丹文香合》（高さ2.8cm 胴径5.5cm 底径3.2cm 所蔵no2192）（図4）は、黄磁藤花図花瓶と同様の薄黄色の有色素地を型成形し、牡丹の花弁と葉の部分に鋭い線彫りを加えて牡丹文様を作り、赤色、水色、白色の釉下彩を施したものである。これも黄磁とも呼べる有色磁の可能性が高く、その上、抑えた色調の釉下彩料、精緻な彫りによる牡丹文様が施され、先の《黄磁藤花図花瓶》と同様の装飾への高い指向が現れているという印象を持つものである。底部中心には幅0.7cmほどの「陶」の印銘（図6）を伴うが、比較すると《黄磁藤花図花瓶》とは、異なる印銘であることがわかる。

《釉下彩唐草文花器》（高さ28.0cm 胴径29.0cm 口径11.2cm 底径12.5cm 所蔵no907）（図7）は、頸が短く丸みを帯びた器体に、図案化された大きな唐草文などが構成されている。素地には若干黄色味が感じられ、これも黄磁である可能性を感じる。唐草文を描いた明暗2種の茶色の彩色の上にはマット釉が施されている。茶色の文様部分は触れるとわかるほど、厚く盛り上げがなされたことがわかる。さらにその上から上絵付で炎文が肩上部に施されている。底部には「陶」の印銘（図8）を伴っている。「陶」の印銘を比較すると、産総研所蔵の《釉下彩唐草文花器》（所蔵no907）の「陶」の印銘は、その大きさ、書体から植田家の《青磁耳付花瓶》と同じ印を用いた可能性が高いことがわかる。

《釉裏紅唐草文花瓶》（高さ33.4cm 胴径21.5cm 口径6.6cm 底径8.2cm 所蔵no2089）（図9）は、頸のない紡錘形の器体に、辰砂で唐草を描き、その上に釉薬を掛けたものである。「陶」の印銘の有無は、釉薬が比較的厚く掛かり、しかも白濁した釉調によって確認出来ないが、1919（大正8）年の第6回農展図録の掲載写真との照合から、京都市陶磁器試験場の試作と判断出来るものである。

このように、産総研に残るいくつかの試作を検証していくと、印銘や有色磁である黄磁制作などといった特徴から、大正期の試作である可能性が高いことが指摘できる。

産総研には以上の4点の他に、白磁山水彫刻香合 (no2311)、青磁染付葡萄図花瓶 (所蔵 no1607)、鴨置物 (所蔵 no675)、鴨形置物 (所蔵 no1668) の4点が京都市陶磁器試験場の試作と確認、あるいは推測される作品がある (註 20)。

次に《青磁耳付花瓶》の他に植田豊橋が所蔵していた試作について述べる。

《青磁盃》(高さ 3.9cm 口径 12.2cm 底径 4.6cm) (図 13) も、素地は青磁耳付花瓶と同様の色調を持つもので、やはり有色磁と考えられる。高台内に「大典記念陶」と記した円形の象嵌銘 (図 14) があり、また共箱蓋に「献上青磁 盃」(図 15) とあることから、1915 (大正 4) 年頃の制作であることがわかる。

《鉄赭釉天目茶碗》(高さ 8.0cm 口径 12.0cm 底径 4.3cm) (図 16) は、赤く発色した鉄釉が特徴的な抹茶碗であるが、器体は釉薬の試験体 (テストピース) かと思われるほど簡素な作りである。「陶」の印銘を伴わないが、共箱があり、その蓋表には「鉄赭釉 天目茶碗」の墨書 (図 17) があり、裏面に「京都市陶磁器試験場之印章」の朱印 (図 18) がある。この試作に見られる鉄赭釉の他、植田家には天目釉茶碗の箱書きを持つ試作もあり、京都市陶磁器試験場時代に東洋的な釉薬技法研究に幅広く取り組んでいたことが裏付けられる。1911 年から 1914 年まで技手として在籍した小森忍が中国陶磁研究に没頭したという研究、試作は、こういった釉薬研究であろうか。

《染付蝶文碗》(8 個 高さ 4.5cm 口径 8.9-9.0cm 底径 3.6cm) (図 19) は、吹き技法によるコバルトの濃淡によって、図案化した蝶文様を施した小振りな碗で、幅約 0.7cm の「陶」の印銘 (図 20) を伴うものである。この印銘は《黄磁藤花図花瓶》のものと同じである可能性が高く、《釉下彩牡丹文香合》とは違うタイプの印銘である。

これらは、植田豊橋の所蔵であったことが明らかであるから、その在任中の大正期 (1915-1920) に試作されたと考えるのが自然であろう。植田家にはこれら以外にも数点の試作が残っているが、いずれも試作に「陶」の印銘があるか、共箱などを伴うものである。

以上、産総研と植田豊橋ご子孫所蔵の京都市陶磁器試験場の試作について紹介してきたが、いくつかは 1915 (大正 4) 年頃のものであり、その他の試作も文献資料、所蔵先等々と考え合わせると、明治期まで遡り試作時期を広げることが自然ではなく、大正期に収まると考えられるのである。

このように、現時点で実際に確認できる京都市陶磁器試験場の試作は、無きに等しく、制作の時期も限られたものである。その上で、場長の在籍機関を考え合わせると、藤江は 1896 年から 1915 年までの 20 年間であり、植田は 1915 年から 1920 年までであるが、1920 年はほとんどないに等しいので、5 年間となり、京都市陶磁器試験場の活動期間の大半は藤江時代であり、この明治期を中心とした藤江時代と確認出来る試作が出てこない時点で、研究と試作の傾向について判断するのはあまり意味のないことであろう。

例えば、藤江自身、東京職工学校時代より没頭した研究は辰砂釉に関することであったことや、清国窯業視察 (1898 年) の経験があること等からも明らかのように、中国陶磁への理解、関心は高く、翻って藤江時代の京都市陶磁器試験場がアール・ヌーヴォー様式が流行した時期にあったとはいえ、西洋的な図案や技法のみに終始していたわけではないのである。

同様に大正期の植田場長時代においても、農展への出品作記録等からも明らかのように、西洋的な技法や図案を取り入れた試作は並行して後年まで続いている。

であるから現段階では、判明した大正期の試作に関連して、考え合わせるべき事柄のことを述べて、本論を締めくくりたい。

まず、植田豊橋による東洋趣味を重視した試作ということを含め、今後検証する上で、次のようなことを

確認しておく。かつて京都市陶磁器試験場の技手であった小森忍は、1930年から瀬戸山茶窯にて、他に先駆けて新たな西洋食器制作に取り組むが、取り組んだ理由の一つとして、在職中の場長であった植田が「日本陶磁器の世界に進展するには、東洋陶磁の粋を表現した、西洋食器の製作研究をなし大に輸出すべきである」と唱えていたことに触発されたと述べていた（註21）。

つまり、植田豊橋による東洋趣味を重視した研究、試作とは、時流に沿った古陶磁への科学的アプローチとその産業的・芸術的応用を図るものであると同時に、京都市陶磁器試験場の設立趣旨に基づき、国内向け陶磁器の改良に留まらず、輸出振興をもつねに意識したものであったと言える。この方向性は、植田が初代所長に就任した国立の陶磁器試験所（1919年以降）の活動に一層顕著に現れる。

次に、大正期における陶磁器制作を取り巻く新たな動向として、古陶磁の鑑賞の流行があり、例えば、京都においては、先に紹介した1915（大正4）年『大典記念京都博覧会報告』によって、御大典を記念し毘沙門堂の青磁など、古陶磁の名品が展覧されたことが知られ、また1917年より松風嘉定を中心に、京都の製陶家たちが古陶磁研究会である好陶会が活動を開始している。古陶磁鑑賞から芽生えた東洋陶磁への関心は、学術的な研究へと発展し、中でも大河内正敏を中心とした研究団体、彩壺会の活動などが知られている。

こうした中国、韓国そして日本の古陶磁を再認識する機会の増大が、東洋陶磁への新たな関心を急速に芽生えさせ、それが京都市陶磁器試験場の研究・試作に影響を与えたであろうことが想像される。つまり、京都市陶磁器試験場において場長の交替だけではない、時流の中での科せられる新たな命題が大正期に生じたということである。

本論ではその研究目的、重要性を十分に理解したとは言えない京都市陶磁器試験場の大正期の試作を取り上げた。実際の事例を今後の基礎資料、検討材料として提示する以外に付け加えられたことはほとんどないが、ここで紹介した試作を含め、京都市陶磁器試験場の活動について、今後も重要かつ急務な課題として引き続き検証していきたい。

註1 京都市陶磁器試験場に関する先考研究には、鎌谷親善の緻密かつ詳細な研究があり（「京都市陶磁器試験場 明治29年～大正9年」Ⅰ・Ⅱ『化学史研究』1987年第3号・第4号）、基礎的な文献史料から体制、活動、背景をまとめている。しかし、試験場の独自の研究や試作、外部からの依頼試験といった、製陶技術やデザインに関する具体的な活動内容は扱っていない。また、その他、実際の試作などに関する研究も見受けられない。

註2 『本場創立沿革答申書』（1902年・1905年）

註3 植田哲哉・編著『名工研陶磁器部門75年の歩み』（名古屋工業技術研究所 1998年）

註4 拙稿「産総研に残る参考収集品について」『収蔵品（陶磁器）総目録』（独立行政法人産業技術総合研究所中部センター 2009年）

註5 『東宮殿下奉祝陳列陶器類目録』（1910年）

註6 『大日本窯業協会雑誌』170号（大日本窯業協会 1906年）

註7 この《青磁耳付花瓶》献上についての記録はまだ確認出来ていない。

「京都市ノ献上品」『大正大禮京都府記事關係寫眞材料』（1915年）にこの《青磁耳付花瓶》が写っている。

『京焼多彩なり—明治から昭和へ』展覧会図録（宮内庁三の丸尚蔵館 2007年）等参照
この宮内庁三の丸尚蔵館所蔵《青磁耳付花瓶》の印銘の有無については、宮内庁三の丸尚蔵

- 館 研究員 岡本隆志氏にご教示をいただいた。記して感謝するものである。
- 註 8 産総研では、2009年12月、初の所蔵品の総目録である『収蔵品（陶磁器）総目録』を刊行した。この刊行のための事前調査に筆者も加わり、京都市陶磁器試験場と国立陶磁器試験所の試作について調査を行った。
- 註 9 京都市陶磁器講習所の試作品は、2004年に当館で行った「近代窯業の父 ゴットフリート・ワグネルと万国博覧会」展で展示した作品 no108《釉下彩鶏雛文盃》があり、その底部に「京」の印銘があり、「京都市陶磁器講習所之印章」の印を持つ共箱も附属する。
- 註 10 『藤江永孝伝』（故藤江永孝君功績表彰会 1932年）
- 註 11 『京都市立陶磁器試験場行績概要』（1931、32年頃 ガリ版刷 陶磁器試験所の出版物と思われる）
- 註 12 中澤岩太の講演記録『京都陶磁器試験場創立二十周年記念式場ニ於テ所感ヲ述フ』（1916年4月28日）
- 註 13 中ノ堂一信著「清水六和の陶芸」『現代日本の陶芸第1巻 現代陶芸のあけぼの』（1985年）
- 註 14 実際の試作については、『収蔵品（陶磁器）総目録』参照。また河井寛次郎と濱田庄司がそれぞれ在籍中に研究した青磁などの釉薬研究の報告があり、今後、内容の具体的な検討が必要である。
- 註 15 産総研の所蔵する陶磁器は、永らく展覧会等で一部が紹介され知られる程度であったが、総目録を刊行したことから、今後、様々な面から検証がなされることを期待する。本論では産総研の試作品について所蔵番号を記載するが、それはこの総目録によっている。
- 註 16 この全体の経緯について、また、国立陶磁器試験所、名古屋工業技術試験場については、植田哲哉・編著『名工研陶磁器部門75年の歩み』（名古屋工業技術研究所 1998年）に詳細にまとめられている。
- 註 17 所蔵する陶磁器は、各試験所が制作した試作品と、国内外の陶磁器を収集した参考品の2種に区分されるが、いずれにしてもそれらに関する台帳の類は現時点では残されていない。また、陶磁器の名称、産地などを示した古いラベルは、1960年代に当時の名古屋工業技術試験所の庶務の人々によって剥がされたことが、元職員の前田武久氏への聴き取り（2009年12月17日）などから判明した。前田氏は抗議したが聞き入れられなかったということである。
- 註 18 植田豊橘ご子息の日記の記述。前後の出来事から1915年と推定されるとのことである。
- 註 19 菊池左馬太郎の略歴、そして、菊池と植田豊橘との関わりなどについては、拙稿「産総研に残る参考収集品について」『収蔵品（陶磁器）総目録』（独立行政法人産業技術総合研究所中部センター 2009年）、および、拙稿「ジャパニーズ・デザインの挑戦 産総研に残る試作とコレクションから」『ジャパニーズ・デザインの挑戦 産総研に残る試作とコレクション』展図録（愛知県陶磁資料館 2009年）参照
- 註 20 実際の試作については、『収蔵品（陶磁器）総目録』（独立行政法人産業技術総合研究所中部センター 2009年）を参照。
- 註 21 服部文孝「小森忍の挑戦」『生誕120記念 小森忍 日本陶芸の幕開け』展図録（江別セラミックセンター・他 2009年）

(1) 独立行政法人 産業技術総合研究所 中部センター所蔵品にみる
京都市陶磁器試験場の試作 (図1-9)



図1 《黄磁藤花図花瓶》



図2 《黄磁藤花図花瓶》
藤花部分



図3 《黄磁藤花図花瓶》
底部「陶」印銘



図4 《釉下彩牡丹文香合》

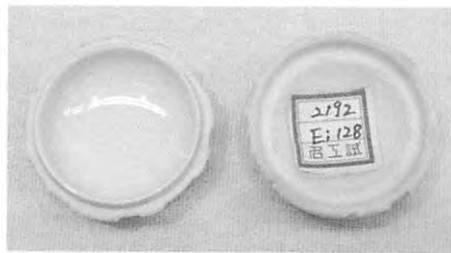


図5 《釉下彩牡丹文香合》



図6 《釉下彩牡丹文香合》
底部「陶」印銘



図7 《釉下彩唐草文花瓶》



図8 《釉下彩唐草文花瓶》
底部「陶」印銘



図9 《釉裏紅唐草文花瓶》

(2) 植田豊橘所蔵品にみる
京都市陶磁器試験場の試作・他 (図10-21)



図10 《青磁耳付花瓶》個人蔵



図11 《青磁耳付花瓶》
底部「陶」印銘



図12 《青磁耳付花瓶》箱



図13 《青磁盃》個人蔵



図14 《青磁盃》高台内部
「大典紀念陶」象嵌銘



図15 《青磁盃》共箱蓋部分



図16 《鉄緒釉天目茶碗》個人蔵

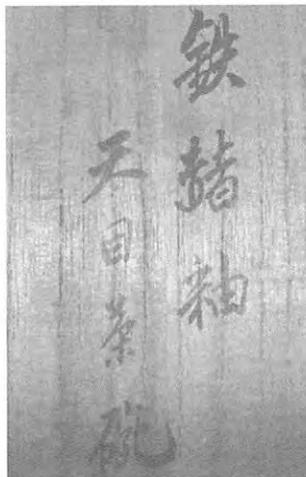


図17 《鉄緒釉天目茶碗》
共箱蓋部分



図18 《鉄緒釉天目茶碗》
共箱蓋部分



図19 《染付蝶文碗》



図20 《染付蝶文碗》
高台内「陶」印銘

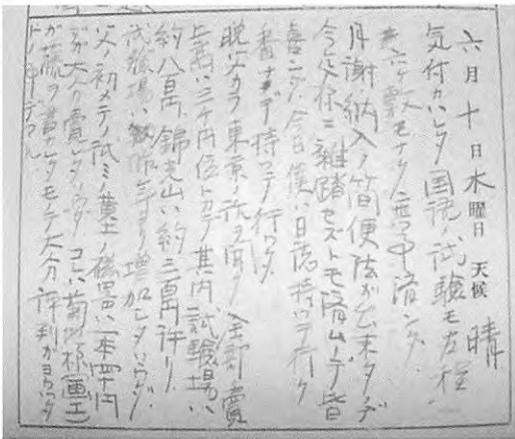


図21 植田豊橘子息の1915年頃の日記

(3) その他 京都市陶磁器試験場の試作・他
(図22-25)



図22 《黄磁龍文香合》個人蔵



図23 《黄磁龍文香合》
共箱蓋部分



図24 京都市陶磁器講習所
共箱、印を伴う試作
《釉下彩鶏雛文盃》
底部「京」印銘
(個人蔵)



図25 『東宮殿下奉祝陳列陶器類
目録』(1910年10月3日頃)
(京都府立総合資料館蔵)